

# 早稲田大学 文化構想学部

国語

総 論

満点	75点	目標得点	58点	試験時間	90分	偏差値	70	
大問数	3 (現代文2・現古漢融合1)	小問数	24					
〔解答形式〕	選択式	21/24問	記述式	3/24問				
〔問題難易度〕	C	0/24問	B	8/24問	A	16/24問	論述式	0/24問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す								

## Topics

- 1… 全体の出題形式は昨年を踏襲。大問(二)がAとB二つの文章を併載した現代文、(二)は現代文単独問題、(三)は現古漢融合問題という大問の構成である。(一)と(三)は、本学部独特の傾向であり、研究と対策は不可欠。
- 2… 現代文問題の負担軽減。大幅に長文化した昨年度と比較して、本年は(一)が合計七〇〇字程度、(二)が八〇〇字程度減少し、短くなった。また、(二)の設問が一題減り、(二)から厄介な複数解答の問題が姿を消したため、時間的負担が軽くなった。
- 3… 漢文の比重の更なる強化。現古漢融合の大問(三)では、漢文関係の問題が増加。また融合問題の現代文もテーマ・文体ともに漢文的色彩の強いものとなり、昨年の現代文とは大きく様変わりした。

## こんな力が求められる！

まずは、(一)～(三)すべての大問に課される現代文の読解力。最近の人物による現代評論から、明治大正期の文章まで対応できる懐の広い読解力が必要。文化・文学評論は頻出なので定期的に目を通し、テーマを「問題意識」として日常的に蓄えておくことよい。読解の分量はかなり多いので、「論理構造」を意識しながら、簡潔に趣旨を把握する能力を普段の授業から練習する。二〇〇八年度限りで影を潜めたが、近代文語文の対策も怠りなく。

語句の知識が設問に直接間接に多く関わるので、漢字を含めた「語彙力」の増強は必須。ただし、大問(一)でA・B二文の関連を見る問題が数題課される他は、早稲田大学の一般的な出題形式とあまり変わらないので、他学部の問題にも積極的にあたり、早稲田現代文の思考法を洗練させておくこと。

大問(三)は現古漢融合問題であるが、設問は平等に付されるので、古文・漢文の学習もおろそかにしないように。古文は例年平易で Standard レベルであるのに対し、後に「大問別分析」でも触れるように、漢文はときに文学史の知識までも要求される。お茶ゼミ設置の漢文講座を基礎の段階から受講し、確かな対策を行うことは必須。その地道な学習は、文語文や語彙力の強化にも必ず反映されるはずだ。

「大問別分析」に書いた「小問別難易度」のA問題を完答く九割、B問題を五割程度の正答率で合格ラインに到達可能と思われる。二〇〇九年度のように時間配分に苦心する場合もあるが、難易度は受験生の実力を十分に把握した標準的なものばかり。Advanced レベルの国語力でも十分対応可能。ただし、受験は相対評価である以上、他の受験生を超える実力が要求されるの言うまでもない。ウィークリーテストでは満点かそれに迫る得点を「毎週」獲得して、基本的な知識の地盤を固めること。

Advanced 国語テキスト所収の早稲田大学の現代文は、難易度Aレベルの問題の割合が多い。満点も視野に入れつつ、85パーセント程度の正答率が必須の条件。難度の高い現代文の並ぶOSクラスであって油断は禁物。やはり70～75パーセント程度の正答率が「安定して」得られねばならない。

平常の授業で知識力・思考力を積み重ね、まずはセンター試験で85パーセント(二七〇点)以上の得点を可能にしよう。自信を持って本番に臨む準備ができるはずだ。

# 大問別分析

【一】

予想配点	25 / 75 点	時間配分の目安	30 / 90 分
文章の種類 / ジャンル	現代文 / 評論		
【出典】	A 竹内好「中国の近代と日本の近代」 B 溝口雄三「〈中国の近代〉をみる視点」		
【文字数】	約四二〇〇字（A 約二六〇〇字・B 約一六〇〇字）		
出題形式	選択式 6 題「傍線部趣旨説明 3 題、空所補充 3 題」 記述式 1 題「同一趣旨の抜き出し」		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す		
問一 B	問二 A	問三 A	問四 A 問五 A 問六 A 問七 B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 高3 OS 早大10 月期 2 回（文化構想学部の過去問演習） 文化構想学部直前特訓・予想問題（ポストコロナリアル批評）			

## ●本大問の特徴・概要

- （一）の A・B 二つの文を読んで解かせる形式は従来通り。しかし、本文・設問ともに年々緩やかに傾向の変化が繰り返されている。
- 二〇〇七～八年度まで続いた「近代文語文＋現代文」という組み合わせが、二〇〇九年からは「古典仮名遣いの現代文＋現代評論」へと移行。本年度はついに両文ともに戦後の評論文となり、古く書かれた方の文章も（促音の大文字化を除いて）古典仮名遣いがなくなった。二つの文章の文体的な懸隔は年々埋まりつつある。

- 設問形式も、二〇〇九年度から若干の変化がある。全七題になり一題減少。そして恒例だった、語彙力の有無を試す問題が姿を消している。加えて（一）必出の A・B 二文章の関連を聞く問題が、前年の二題から一題（問三）のみに減り、難易度は大幅に易化した。全体的にも「易化」したと考えられる。

## ●注目すべき小問

- ・分岐点となるのは問一・問七の二題。両方とも正答し、（一）は満点を目指せ！

問一 傍線部説明問題。直前までの文脈から、「ヨオロッパ化」に対する東洋の抵抗も、「ヨオロッパ化」  
 Ⅱ「世界史の進歩」Ⅱ「理性（合理主義）の勝利」Ⅱ歴史の「自然調節・客観的法則」の一過程に  
 すぎないという内容を読み取ること。

問七 空所補充問題。内容をしっかり考える必要がある点で、問四・問六よりも高度。ここもポイント  
 になるのは直前までの読解。相手を基準にしてみずからを顧みることをしてはいけないのは「自分自身に満  
 足」しているから、という理解を導くことができたかどうか。また、次段落を参考にしてもよい。

・注意すべき文化構想学部の頻出傾向は問三と問四。ただし今年は両方とも平易。落とさないように。  
 問三 大問（一）では必ず出題される、A 文と共通する内容を B 文から指摘するという、二つの文章の  
 関連を読み取る問題。結局はつながりを見つけるものなので、内容的・構造的な対応を意識しよう。  
 今回は設問文もヒント。

問四 複数の空欄がセットになった空所補充。早稲田では他学部でもしばしば出題される。空欄とつな  
 がる前後の表現に注目して、ヒントを求めていきたい。解きやすいものを優先する柔軟性も、この  
 種の問題では必要。

【二】

予想配点	20 / 75 点	時間配分の目安	25 / 90 分
文章の種類 / ジャンル	現代文 / 評論		
[出典]	今福龍太「音の嬖、ことばの隈」		
[文字数]	約二〇〇〇字		
出題形式	選択式 6 題 [脱文挿入 1 題、傍線部説明 2 題、空所補充 2 題、内容一致 1 題] 記述式 1 題 [漢字書き取り]		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 可否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す		
問八 A	問九 A	問十 A	問十一 B
		問十二 B	問十三 A
			問十四 A
お茶ゼミカリキュラムとの関連	二〇〇八年お茶ゼミ模試第 4 回 (今福龍太氏の文章を出題) 冬期講習「高 3 早大現代文」(今福龍太『野生のテクノロジー』)		

● 本大問の特徴・概要

- (一) の現代文単独問題は本年度も継承。
- 現代作家の随筆という形で始まった二〇〇七年度から徐々に文章が評論的になり、本年度はどうとう出典が小説家から離れ、現代を代表する文化人類学者のものになった。昨年度から八〇〇字程度字数は減少したものの、議論は抽象的であり、文体が詩的に洗練されているため読解はそれほど容易ではない。ただし彼は難関大学入試頻出の人物でもある。苦手意識は禁物。全体は一つの趣旨が反復される構造にすぎないので、骨格を確かに捉えた揺るぎない内容理解に努めたい。
- 小問数は七題で、前年通り。ただし、全体の設問はやや軽量化した印象を受ける。脱文挿入問題が復活する一方、漢字書き取りが一題のみに縮小。客観問題も選択肢が短文化し、昨年度突発的に出題された「合致しない」ものを「すべて」選択する問題も一年限りで姿を消した。結果として、形式的に文化構想学部らしさを指摘できるような設問がなくなり、バランスの取れたオーソドックスな問題になったということが可能であろう。総合的な難易度は「昨年度並み」だと思われる。

● 注目すべき小問

- ・ 点差をつけることのできるのは、問十一・問十二・問十三。他は完答が必須。
- 問十一 傍線部の説明問題。選択肢の表現が工夫されており、すべての設問のなかでもっとも高度。まず、傍線部がこの文の主語であることを踏まえる。すると、述部である「作曲された音の響きと同等に並び立つ、音のゆるやかに接続する地平」に目が向くはず。「同等に並び立つ」って両者が「接続」するためには、ハのように「外部」に存在してはならない。
- 問十二 この空所補充問題は、安易に「特権的」に飛びつくことの無いように。空欄に入るのは、音楽の「現実」。「現実」と「理想」という二項対立の典型から考えてみる。ケージが望むのは、「沈黙を音楽のなかに緩やかに接続」(4 段落) したり、「私たちの音をめぐる思想にまったく新しいヴィジョンをもたらして」(6 段落) いくこと。それと反対の否定的な「現実」は、音楽が自らの分野に閉じこもり、他を排除しようとする「自閉的」な状況だろう。外部を拒絶する姿勢は、前文からも読み取れる。
- 問十三 この内容一致は、消去法を有効に用いよう。ロ・ニ・ホは、誤答の根拠がそれぞれ明確。問題はハの消去。「無機物的」を 1 段落と比較して誤りと認識できるかどうかは、語彙力の有無にかかっている。言葉の知識を積極的に増やしたい。イでもっとも迷う「時間の持続」という指標「は、5 段落の「沈黙という充滿した無時間の持続」や、6 段落の「沈黙という音の持続の創造性」などの表現を援用して解釈すれば、本文の趣旨に合っていると考えることができる。

【三】

予想配点	30 / 75 点	時間配分の目安	35 / 90 分
文章の種類／ジャンル	現代文／小説	漢文／伝記	古文／説話
〔出典〕	甲（現代文） 森鷗外『魚玄機』 乙（漢文） 『唐才子伝』巻八「魚玄機」 丙（古文） 『唐物語』		
〔文字数〕	約二七〇〇字（現代文）約一六〇〇字・漢文Ⅱ一六字・古文Ⅱ約一〇〇〇字		
出題形式	選択式 9 題 「傍線部趣旨説明 3 題、理由説明 2 題、漢文の返り点 1 題、空所補充 1 題、内容一致 1 題×2」 記述式 1 題 「文学史（漢文）」		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 可否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す 問十五 A 問十六 A 問十七 B 問十八 A 問十九 A 問二十 B 問二十一 A 問二十二 A 問二十三ともに B		
お茶ゼミカリキュラムとの関連	お茶ゼミ設置の一連の「漢文」講座 夏期講習「古文読解上級」12 課（白居易『長恨歌』の知識）		

●本大問の特徴・概要

- (三) の現古漢融合問題も例年通り。
- 甲の現代文は森鷗外の歴史小説。昨年度までのような、純粋な評論読解をもとにした「現代文らしい現代文」が (三) では出題されなくなった。
- 乙の漢文は二〇〇八年以来の、独立した漢文問題が復活。分量は前年並みだが、融合文とは違ってまさに現代文の助けがないため、そのぶん本当の漢文読解力が試される。また、Topics でも記したように、漢文の問題が増加傾向。句法・文学史・読解までの幅広い漢文学習は不可避といえよう。
- 丙の古文『唐物語』は、入試頻出の説話。ここ数年、漢文より古文の比重が相対的に軽く、付帯的な位置づけに止まる印象がある。今年も語彙・内容ともに相変わらず平易であった。
- 二〇〇九年度からの傾向変化に戸惑った学生も多かっただろうが、解答に苦労する問題は昨年度にもあり、全体としては「前年並み」の難易度と考えることができよう。

●注目すべき小問

- ・問十五・十九は、学習している人には基本。つまりできない人ときっちり差がつく問題。地に足のついた漢文学習は、本学部受験の学生はもはや必須である。
- 問十五 昨年度に引き続いて漢文（漢詩）分野から文学史が出題された。昨年の陶淵明に対して、今年 は白居易の代表作。記述で解答するため昨年度より実力差が明確に現れる。
- 問十九 漢文の返り点問題。傍線部の「使」が、普通「ししメバ」と使役のように訓読する、仮定の用法であることに気づくこと。
- 問二十 古文の傍線部解釈（説明）。「何となく」ではなく、「根拠」をふまえて筋道だった解答の導きを行いたい。白楽天の零落した状況と、「しづまざりけり」の「ざり」が打消の助動詞であること を踏まえて、「私一人だけが沈んではいない」というのがこの骨格となる趣旨だと気づくこと。
- 問二十三 現古漢すべてにまたがった内容一致。問題文全体を見る必要があるため手間がかかる。ただ、 選択肢そのものに判断を惑わす微妙な表現はないので、本文と選択肢を丁寧に照合すれば容易 に解答可能。もちろん「二つ」答えることも忘れずに。